

伝説の形成

松本では当然のごとく貞享騒動が取り上げられ、その副産物として嘉助の怨念が大天守を傾かせたという伝説が生まれました。その経緯をしらべた松本市文化財審議会委員の中川治雄氏は「松本城の嘉助伝説の成立過程」をまとめました。中川氏の研究成果を参考に、怨霊伝説誕生までを追ってみます。

まず、明治十一年四月から民権家の竹内泰信が、松本新聞に連載した『中萱嘉助略伝』の処刑場面では、「此の嘉助が魂魄の此世に在るや否やを験すは、地頭が住む城内の天守を見よ、北へ傾くことあらば、霊魂赫々と在るとしれ」とあります。怨念によって城が傾くまでには至っていませんが、ここに初めて松本城と多田嘉助が結びつけられました。

その翌年の二月に、やはり民権家で芝居巧者の松沢救策が公演した『民権鑑嘉助の面影』では、「はつたと睨めし眼光に、城もこなたへゆるゆるかと思う計りに見へにけり」として、「城を睨む」という表現が用いられます。

これは、松本城を眼下にする勢高刑場のロケーションが、作品に反映したと考えられます。勢高刑場の場所は昭和二十五年（一九五〇）の丸ノ内中学校建設工事の際に初めて特定されたため、作品発表時は分からなかったはずですが、松沢氏は地域の言伝えなどから勢高刑場の見当をつけていたのかもしれない。



勢高刑場跡付近から見下ろした松本城（松本市宮淵 丸ノ内中学校付近）